

附録第一

一、掃海装置

明治四十一年八月艦艇装置方針調査委員會決議録中特ニ水雷術ニ關スル事項

議 題

掃海装置ヲ艦首へ裝備スルノ要否如何

決 議

戰艦裝甲巡洋艦ニハ浮流水雷及我特種水雷ノ如キ水雷ノ危害ニ對スル排除器ヲ艦首ニ裝備スルヲ必要ト認ムルニ依リ充分ノ研究アラムコトヲ望ム

二、水雷防禦網

議 題

水雷防禦網ノ長幅並ニ所要具ノ適良ナル構造裝置如何

決 議

(一) 潜水艇其ノ他ノ水雷ニ對スル防禦トシテハ爾今水雷防禦網ヲ艦ノ全周ニ圍繞スルト共ニ其ノ深サヲ鹿島、香取ト同様ナラシムルコト(水面下二十五呎、水面上約三呎)

(二) 水雷防禦網ヲ載スベキ棚、同「スパー」ノ取付根及同支臺ノ構造ハ激浪ノ爲毀損セザル様充分堅牢ナラシムルヲ必要ト認ム

三、機械水雷落下裝置

議 題

機械水雷落下裝置ヲ艦尾ニ裝置スルノ適否如何

決 議

(一) 戰艦裝甲巡洋艦ヲ機械水雷落下ニ使用スルハ適當ナラズト認ム

(二) 其ノ他ノ艦船ニ於テ臨時敷設ヲ要スル場合ハ現用ノ方式ニ依ルヲ可ナリト認ム

(三) 艦載水雷艇裝四十二呎汽艇ノ後部ハ機械水雷落下裝置ヲ取付ケ得ル様構造スルヲ必要トス

特 敷 設 艇		三等敷設艇	二等敷設艇	捕獲網艇	急設網艇	一等掃海艇	*驅逐艇	母艦及特務艇	敷設艦	驅逐艦
搭載		同右	同右	同右	搭載				搭載	記事参照
搭載 大型 小型	搭載 一二		同右	同右	同右	同右	搭載 一八		搭載 一八	搭載 一等 二等 三六 一八
	裝備 二基		同右	同右	同右	同右	裝備 二基		裝備 二基	裝備 二基
同右	裝備 二組				裝備 二組			裝備 二組	裝備 二組	
搭載、 戰列 ノミ		同右	同右	搭載 一組		同右	搭載 二組			三號ヲ有セザルモノニ 但一七〇組 噸級ヲ除ク
						同右	裝備 二組			記事欄標準 ニヨリ二組 搭載一七〇 噸級ヲ除ク
						同右	搭載 二組			二號ヲ裝備 スルモノニ 搭載二組
同右	裝 備		同右	同右	同右	同右	裝 備	同 母艦潛水 艇ノミ	同右	同右

船 艦 設							
特務艦	砲 (中型)艦	砲 (大型)艦	航門艦	基準網艇	捕獲網艇	驅 (大型)艇	掃海艇
/	/						
/	同 右	同 右	搭載 八		搭載 一二	同 右	搭載 八
/	/		裝備 一基			裝備 一基	
裝備 一組	/	裝備 一組					
/	/						搭載 二組
/	/						
/	/						
/	同 右	同 右	裝 備		同 右	同 右	同 右

(備考)

- 一、*驅逐艦ハ掃海ノ任務ニ從事スベキ舊式驅逐艦ヲ示ス
- 二、驅逐艦等ニ裝備スベキ三號掃海具二組中一組ハ展開器ノミトス
- 三、特務艦船中ノ特務艦ハ戰列部隊用(運送船、測量船、工作船等)ヲ示ス
- 四、本標準ニ基キ特設艦船主要兵裝標準ヲ改正スルモノトス

(記事)

附録第三

- 一、大掃海具三號ヲ裝備スベキ驅逐艦ハ一等驅逐艦ニ在リテハ全隊數ノ $\frac{1}{4}$ 、二等驅逐艦(掃海ノ任務ニ從事スベキモノヲ除ク)ニ在リテハ全隊數ノ $\frac{1}{2}$ ヲ標準トス
- 二、驅逐艦、爆雷搭載數ハ戰時定數ヲ示ス平時ハ其ノ半數トシ庫量ハ平時搭載數ニ對シテ準備スルヲ例トス
- 三、號持海具裝備艦ニ在リテハ平時搭載數ヲ以テ定數トス
- 四、驅逐艦ノ爆雷投下軌道ハ各種機雷ニモ流用シ得ル如ク考慮スルコト
- 五、特務艦及特設艦船ニ裝備スベキ防雷具ハ低速防雷具トス
- 六、主力艦ノ搭載水雷艇ニハ簡單ナル爆雷投下裝置ヲ裝備シ爆雷定數ヲ四個乃至八個トス
- 七、水中聽音機ハ有効ナルモノヲ兵器ニ採用次第裝備スルモノトス
- 七、特務艦(捕獲網艇、敷設艇等)ニ搭載スベキ兵器ハ當該防備隊充當兵器ヲ以テ之ニ充ツルモノトス

明治二十九年臨時技術教育取調委員會報告中水雷術ニ關係アル

議案及決議事項摘要(二九、一二、二八報告提出)

- 一、我國ノ水雷艇ハ今後專ラ八十噸内外ノモノヲ選用シ其ノ他ノ艇ハ之ガ補助艇トシテ採用セラルルヲ要ス
- 一、驅逐艦水雷艇ハ今後大ニ製造セラルルノ必要アリ
- 一、我國現時ノ水雷艇中最モ好ク諸般ノ役務ニ堪ユベキモノヲ「ノルマン」式八十噸艇ト爲ス然レドモ其ノ汽罐ハ多少ノ改良ヲ要スルガ如シ
- 一、今後製造セラルベキ水雷艇ハ艇内寒暑ノ防禦ニ一層注意ヲ加フルヲ必要トス

- 一、水雷艇ノ舷外ニハ突出物ナキヲ要ス且艇體ヲ保護スル爲防材ヲ外舷ニ貼附スルヲ要ス
- 一、水雷艇ノ錨及錨鎖ハ一層大型ノモノ一組ヲ備付ケ別ニ豫備トシテ一組ヲ便宜ノ位置ニ備付ケ置クヲ要ス
- 一、揚錨機ハ輕便ニシテ揚錨迅速ナルモノヲ採用セラルルヲ要ス
- 一、大形水雷艇ニハ上甲板司令塔ノ近傍ニ海圖室ヲ設クルノ必要アリ
- 一、水雷艇ノ前舵ハ運用上甚ダ必要ナルモ示錨浮標索ノ之ニ纏擲シテ危險ニ類スル場合屢アリ故ニ之ガ改良ヲ爲スハ今日ノ必要ナルガ如シ出來得可クンバ艇ノ「キール」以上ニ於テ「ステム」ニ幅狭キ舵ヲ附着スルコト收容軍艦鐵東ノ如クセバ前記ノ弊害ヲ除クコトヲ得ン敢テ造船家ニ請ル
- 一、水雷艇ニバ端舟ヲ備付ルヲ要ス(艦載艇ヲ除ク)

決 議

本案ハ總テ水雷艇乗組將校等ヲシテ委員ヲ編制セラレ研究取調アランコトヲ望ム

- 一、電氣燈ハ場合ニ依リ水雷艇ニ甚ダ必要ナルヲ以テ可成備付ケ置クヲ要ス
- 一、我國ニ於テ使用スル佛式發射火藥ハ濕潤シ易ク到底水雷艇用ニ適セス依テ調査ノ上無煙火藥或ハ獨逸製藥英式等ニ改ムルヲ必要トス
- 一、水雷艇ノ旋回發射管ハ皆次第ニヒ形ニ改造セラルルヲ要ス
- 一、水雷艇ニ使用スル魚形水雷ハ未ダ之ヲ保式ト交換スルノ時機ニ達セズ
- 一、水雷ニ裝氣スルニハ發射管ニ裝填セル儘行フヲ得ベカラシムベシ又長螺短螺ノ挿脱モ水雷裝填ノ儘行ヒ得ル様發射管ニ孔ヲ穿ツヲ要ス
- 一、實用「ピストル」ノ安全「ピン」ハ速ニ一層堅固ノモノニ改造スルヲ要ス
- 一、小形水雷艇ハ固定發射管大型水雷艇ハ旋回發射管ヲ利アリトス
- 一、平水ニ於テ固定發射管ヨリ八十八年式朱氏水雷ヲ發射スルニ艇ノ速力二十節迄ハ水雷ノ効力ヲ損スルコトナシ

- 一、小艦及「クルーナー」式三十五米水雷艇ノ前部發射管ハ空氣發射裝置ニ改造セララルヲ要ス
- 二、砲力ハ水雷艇ニアリテモ甚必要ナルモノナリ故ニ艇ノ許ス限リ有力ノ速射砲ヲ積載スルヲ要ス
- 一、現時我海軍ニ採用サルル防材ノ構造ニ一定ノ模型無キモノノ如シ故ニ之ガ適當ノモノヲ選定セラレンコトヲ要ス

附錄 第四

一 等驅逐艦ニ六十一糎魚雷裝備ニ關スル資料

一、五十三糎魚雷ト六十一糎魚雷トノ能力比較

魚 雷	炸 藥 量	最 大 射 程	各 射 程			雷 速
			ニ	對	ス	
六十一糎 (八年式)	三五〇斤	二萬五千米	二 萬 米	一 萬 五 千 米	一 萬 米	三十六節半
五十三糎 (六年式)	二〇〇斤	一萬五千米	二 十 四 節	二 十 七 節	二 十 七 節	三十二節

二、改裝ノ要點及改裝ニ伴フ影響

五十三糎二聯裝發射管三基ノ代リニ六十一糎三聯裝發射管二基ヲ裝備シ搭載魚雷總數ヲ十二個トス又本改裝ニヨリ排水量ニ於テ三十斤ヲ増加シ其ノ結果トシテ最高速度ニ於テ約四分ノ一湮ヲ減ス

(別表参照)

三、豫算ノ變更

本兵裝變更ノ爲發射管ニ於テ約八萬圓ノ増加ヲ要スルノミニシテ魚雷ノ價格ハ發射管一門ニ對スル製造數五十三糎魚雷六本ノ

代リニ六十一種魚雷四本トセバ魚雷ノ豫算ニハ増加ヲ要セズ
 四、魚雷及發射管ノ供給

大體ニ於テ十二年度以降海軍工廠ニテハ主トシテ六十一種魚雷ヲ製造シ長崎兵器製作所ニテハ五十三種魚雷ノミヲ製造スルコトトシ又發射管ノ製造ハ海軍工廠ノ外適當ニ部外工場ヲ利用セバ製造供給充分可能ナリ

五、適用シ得ル驅逐艦名

本兵裝變更ハ左記四隻ヲ除キ十二年度以降建造豫定ノ一等驅逐艦ニ適用シ得ベシ

第十一、第十三、第十五、第十七驅逐艦

(備考)

二聯裝三基ノ代リニ三聯裝二基ヲ採用セル理由

一、場所ノ關係上(五十三種發射管ノ如ク機械室上ニ八年式發射管二基ヲ裝備スルコトハ長サニ於テ許サズ)二聯裝三基ハ搭載シ得ズ三聯裝二基ナラバ搭載シ得ルニ由ル

二、從來聯裝發射管ニハ開角裝置ヲ設ケ全發射管ノ齊射ヲ計畫セシモ發射管ノ機構及使用上種々ノ困難ヲ生ジタル爲最近聯管ヲ並行固定トシ開角裝置ヲ廢シ全發射管ノ齊射ノ代リニ短秒時ヲ隔テテ各基一管宛ノ齊射ヲ以テスルニ至リシ結果射法上三聯裝トスルモ毫モ差支無キニヨル

三、三聯裝發射管ノ右管又ハ左管發射ノ爲所要旋回度ニ對シ發射管軸線ノ移動ハ充分之ヲ防止シ得ル如ク計畫セリ

(別表)

五十三種搭載驅逐艦ト六十一種搭載ノモノトノ主要々目比較表

要目	六十一種驅逐艦	五十三種驅逐艦
垂線間ノ長サ	三三〇一〇 ^呎	三三〇一〇

附録第五

各種艦船水雷兵装艤装改定變遷例

一、軍艦出雲

メタセントリック、ハイト	速力	全馬力	排水量	吃水		船體中央部深サ	幅	全長
				平均	後部			
二、一二呎	三七、〇節	三八五〇〇	一四三〇トン	九一八 $\frac{3}{4}$	一〇一八 $\frac{3}{4}$	一九一〇	三〇一〇	三三六一六
二、一六	三七、二五	三八五〇〇	一四〇〇	九一七	一〇一七	一九一〇	三〇一〇	三三六一六

年 月	記	事
明治 三五、一	搭載兵器	
一三、一 一三、六 一四、五	<p>水雷發射管 安式十八吋水中發射管四門ニシテ前部及後部ニ分ツ前部發射管ハ「ホルルトテツキ」ニアリ其ノ据付位置ハ正横固定ニシテ二度ノ俯角ヲ有ス而シテ左舷ノ者ハ右舷ノ者ヨリ約四呎前部ニヨリ其ノ深サ水面ヨリ十二呎二吋八分一</p> <p>後部發射管ハ又後部「ホルルトテツキ」ニアリ其ノ据付位置ハ後方二十度ノ角度ニシテ固定シ水平ナリ其ノ深サ前部ニ同シ</p> <p>水雷落射機 安式十四吋水雷落射機二個「ベテット」ニ備フ、平常ハ上甲板中部兩舷ニ格納ス</p> <p>探海電燈 四基ニシテ内二個ハ前部上艦橋兩側ニアリ「ソーテーパー」會社式、横置炭棒ヲ有シ燭力二萬五千ニシテ俯仰旋回ハ手働裝置他ノ二個ハ前後上艦橋上ニアリ各自働俯仰旋回裝置ヲ有ス</p> <p>後艦樓四番探照燈還納 後艦橋ニ七十五珊「シーメンシツケルト」式水平燈二臺新ニ裝備</p> <p>前部一番二番七五珊探照燈改裝ノ爲陸揚還納 前部一、二番七五珊「シーメンシツケルト」式水平燈ニ改裝</p> <p>四三式魚雷ト換裝ノタメ三八式二號魚雷全部佐兵器庫ニ還納</p> <p>十八吋水中發射管發動鈎子四門分 四三式魚雷ノ發動挺ニ適合スル如ク位置變更竝ニ改造ヲ行フ</p> <p>四三式魚雷八個搭載</p> <p>水雷防禦網(長サ二二呎巾一六呎)四十枚展張要具附屬具類一式佐世保海軍工廠ニ還納</p> <p>四十五糎魚雷使用停止トナリ左記諸兵器ヲ還納</p> <p>四十五糎魚雷、方位盤、發射電池、魚雷用諸兵器、實用頭部裝藥及附屬火工品、但シ還納品ハ戰時ハ搭載ノ豫定ナリ</p> <p>落射機魚雷三個三十六糎及同附屬具還納 四十五糎魚雷四四式二號三個同附屬具ヲ受入</p> <p>水雷艇落射機々臺取付改裝</p> <p>探照燈及同附屬具竝ニ電器諸器具ヲ砲術科へ保管轉換</p>	

二、軍艦金剛（巡洋戦艦）

年 月	記 事
大正元年 八月	英國愛蘭「ベルファスト」海外ニ於テ發射管六門（1、3、3、5、7、8）ノ公試ヲ行フ艦速二十五節ニテ發射ノ際發射管ニ異狀無カリシモ魚雷ハ全部氣室後端ト秘密室接合ノ「リベット」ニ弛ミテ生ジ甚シキハ魚雷屈曲セリ（魚雷ハ英保式ニテ脆弱ナリシニ依ルト認ム） 發射管ヲ四四式魚雷ニ適合セシムル爲起動鈎ノ位置ヲ移動ス 方位盤ヲ圓形方位盤ニ改裝 發射管維持裝置及發射弁ヲ改造 二番發射管内筒匙形亀裂ヲ生ジ換裝 兵器簿制定セラル（官房九〇五號） 縱舵機ヲ三年式（空氣式）ニ改ム 方位盤ヲ四七式ニ改ム 水雷發射指揮通信裝置ヲ新設ス 前部探照燈臺ヲ擴張シテ第一魚雷指揮所トシ前部司令塔ヲ第二魚雷指揮所トス 六年式魚雷供給ノ爲發射管ヲ改造ス 防雷具（B型）ヲ裝備ス 戰艦艦橋新設ニ付第一魚雷指揮所ヲ同所ニ變更ス 三、四、五、六番發射管ヲ撤去ス
昭和 四、六	

（備考）大正八年三月達第四十號ニ依リ無線電信、探照燈竝ニ電路ハ水雷長主管ヨリ通信長主管ニ移ル

一、山風、海風

三、第十七驅逐隊 (山風、海風) (檜、榎)

明治四十四年十二月	三八式二號四十五糧魚雷搭載
大正 元年十二月	四三式四十五糧魚雷ト引換
同 四年 九月	發射管ヲ四三式及四四式魚雷ニ適合スル如ク一部改造
同 四年十二月	乙種機雷落下裝置裝着
同 五年十一月	四四式四十五糧魚雷ト引換

二、山風、海風、檜、榎

昭和四年 十月	(一) 各艦發射管二基共取外シ魚雷全部還納 (二) 大掃海具三號關係裝置裝備 (三) 爆雷發射機二基及落下臺裝備
---------	--

(備考) 當隊ハ大正元年海風、山風ノ二隻ヲ以テ第十六驅逐隊ヲ編制セシガ爾後更ニ檜、榎ノ二隻ヲ併セ第三十二驅逐隊トナリ更ニ昭和ニ入り第十七驅逐隊ニ改名セラレタリ

帝國海軍水雷術史(第七編)終